［研究ノート］

北陸学院大学ヘッセル記念図書館における学生協働
－学生図書館サポーターの活動を中心に－

Student Cooperation in Hokuriku Gakuin University Hesser Memorial Library
― through the Activities of Student Library Supporters ―

若　杉　亮　平[*1]、飯　野　昌　子[*2]

要旨

近年、大学教育の中で図書館の果たすべき役割が大きなものとして求められている。人的あるいは物的な資源が潤沢でなくとも、資料や情報の提供に留まらない大学図書館のあり方が必要とされている。北陸学院大学ヘッセル記念図書館においては、司書数の減少を学生協働の試みにより補い、それだけではなく学生の教育にも資する活動を模索している。2013年度後期より開始したこの活動を学生図書館サポーターと呼び、大学図書館の広報活動を主軸として、企画展示や学生選書などを実施している。

キーワード： 大学図書館(university library)／協働(cooperation)／
学生図書館サポーター(student library supporters)

Ⅰ．はじめに

近年、大学教育の場においても様々な変革が求められ、教育の質的な充実が求められるようになった。この流れに対しては、個々の大学全体で取り組むべき課題であり、さらには大学全体で共有すべき問題でもある。特に個々の大学において、その研究・教育機能を最大限に生かすため、ラーニングコモンズの整備や大学図書館の変化も求められている。

例えば文部科学省が科学技術・学術審議会の審議まとめにおいて「大学における教育に関しては、学生は授業を受けるだけでなく、より自発的な学習や実践の必要性が重視されてきており」[1]といった文言が盛り込まれ、大学図書館の役割は研究・教育を支える場所から、さらに一歩踏み出した役割が求められている。

北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部（以下、北陸学院大学）では、大学の規模に比して充実した蔵書を誇ってきた。過去の短期大学のみの時代においては、蔵書の規模や図書館職員についても比較的よく整えられてきた。しかし、2015年現在においても図書館運営全体が恵まれた状況にある訳ではない。過去においては現在と比べて充実した職員体制のもとで、図書館運営がなされていた時期もある。当然、人と予算を投入すれば見かけ上は、図書館の状況は良くなったように見えるだろう。だがしかし、大学や大学図書館が大きく変革を求められ、資料や情報の提供に留まらない大学図書館の役割を見出そうとする時、予算の問題や教職員だけではないより大きな力が求められている。

Ⅱ．大学図書館における学生協働

いわゆる学生協働とは、なんらかの組織・団体と学生が協働して目的を達成することにより、学生に対する教育となるばかりでなく組織・団体にとってもメリットがある活動だと理解される。与えると側と受けとる側、教育をする側と教育を受ける側などといった固定的な役割を脱することに

*1 WAKASUGI, Ryouhei
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科
図書館概論
*2 IINO, Masako
北陸学院大学 ヘッセル記念図書館

大きな意義があると考えられる。

大学図書館における学生協働であれば、学生協働の事例調査[2]が行われている。この中では、主に活動を図書館業務サポート、学生選書、学習支援の三種類に分類している。

図書館業務サポートについては、従来から学生アルバイトやボランティアの形で実施してきた大学図書館も多い。しかし、学生協働という考え方のもとで実施するには学生を単なる労働力と見なすのではなく、学生に対する教育的効果やキャリア形成に資するような運用が求められることになる。

学生が本を選ぶという行為については、リクエストの形で行われてきた。しかしリクエスト制度だけでは、学生のニーズを全てすくい取れるわけではない。そこで学生選書という、もう一歩踏み込んだ形が生まれたものと考えられる。さらに学生選書では多くの場合、選書した資料の展示まで行っている。つまり、選書にとどまらず企画展示の部分をも担う可能性がある。

学習支援は、いわゆるピア・サポートと呼ばれる活動であり、レポートや学習相談などを行っているケースがあげられている。人に教えるという行為は教育的な効果が高く、支援を受ける側の学生だけなく、支援を行っているチューター側にも大きなメリットがあると言える。この学習支援は自主的な学びの場である、ラーニングコモンズと相性がよく、この組合せも見受けられる。

このような大学図書館における学生協働の進展が、北陸学院大学におけるヘッセル記念図書館の諸課題における解決の方法として、利用できないかと考えた訳である。

Ⅲ．北陸学院大学ヘッセル記念図書館の現状と課題

１．北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部

2015年現在の北陸学院大学は、学部として人間総合学部を置き社会学科と幼児児童教育学科からなっている。４年制大学としての北陸学院大学は2008年に開学しており、比較的新しい大学となっている。一方、北陸学院大学短期大学部は、食物栄養学科とコミュニティ文化学科の２学科からなっており、保育短期大学の時代まで遡れば創設は1950年であり半世紀以上が経過している。

大学、短期大学部ともに幾つかの学科を経て2015年現在の形になっている。そしてヘッセル記念図書館は短期大学の時代に開館している。次に、ヘッセル記念図書館の現状と課題、そして学生図書館サポーター（以下、図書館サポーター）創設に至る経緯を述べていきたい。

２．ヘッセル記念図書館における課題

先に述べたように、北陸学院大学ヘッセル記念図書館では一時期の司書数に比べて、2015年現在の司書の数は非常に少ないものとなっている。これについては、後に詳しく述べるが司書２名と臨時職員（４時間勤務）１名という状況である。職員数が少ないということは、図書館運営上で多様な視点を持つという点において不利である。さらには定型的な図書館業務に時間を取られてしまい、新しいサービスの開発や図書館利用教育、展示企画といった拡張的な部分に手が回らなくなる恐れが高い。

また、近年特に大学教育においては質的な向上が求められており、図書館でも本を貸し出し、レファレンスに応じていれば良いという状況ではなくなりつつある。学生の能動的な学習について、図書館も何からの形で関わっていくことが求められている。

一つの形として図書館におけるラーニングコモンズの整備があげられる。実際にヘッセル記念図書館でも2014年12月に図書館２階にラーニングコモンズの整備が行われ、閲覧室の形から能動的な学習に向いた什器へと置きかえられた。しかし、設備の充実・更新は重要であるとは言え、ラーニングコモンズを整備しただけでは図書館が主体的に学生の能動的な学習に関わっているとは言えず、「場所貸し」に終始してしまえばこれまでと同じ状況となってしまう。

ヘッセル記念図書館における現在の課題としては、主に人的な資源に関連する部分が大きい。２階に設置されていたレファレンスカウンターは、人を手当できないため１階のカウンターで全ての業務をまとめて行っている。さらに、土曜開館も行うことができていない。平成26年度学術情報基盤実態調査[3]によれば、土曜開館を行っている大

学図書館は83.3％に上り、休日開館も65.1％が実施している。

また今後の安定的かつ挑戦的な図書館運営のためにも、司書の人材育成が必要不可欠と考えられるが、これについても十分に実現できているとは言い難い面がある。

幾多の問題がある中で、予算や特殊な技能に頼らない方法であれば、すぐにでも着手をすることが可能である。そこで問題解決のための糸口として、図書館が学生とともに何かを行うというアプローチが考えられる。

３．ヘッセル記念図書館の現状

ヘッセル記念図書館は、北陸学院百周年記念事業の一環として、創立者メリー・K・ヘッセルの名を冠し1981年10月15日に開館した[4]。当初から貸出冊数に制限を設けず、卒業研究や実習等の期間に合わせた特別貸出、リクエスト制度等、「利用者第一主義」をモットーに運営してきた。特に力を入れてきたのが、利用教育である。ほとんどの学生にとって、本学が最終学歴となると考えられ、「一生を通じて図書館を身近に感じてほしい」、「図書館に行けば何とかなる」、を刷り込める最後のチャンスととらえてきた。

開館時、館長と司書７名という恵まれた体制であったが、他部署への異動、退職等で人手が減り、2013年４月から、司書２名と臨時職員（４時間勤務）１名となった。人員の減少の都度、サービスの質を落とさず、どのようにカバーしていくかに苦心してきた。

1986年４月、司書１名が教員となり、司書６名となった。以前から「学生図書委員」を各学科、学年２名ずつ（当時は保育、食物栄養、英語、教養の４学科）の20名で組織してきた。図書館報「点鐘」や「新着図書案内」の配布が主な仕事で[5]、司書の人員減を契機に委員会の見直しを図った。1987年度、月１回、昼食時に学生図書委員会を開催、1995年度から、委員長、副委員長を選出し、学生主導の委員会運営となった。1995年度の図書委員の感想文に、「もっと（図書館の）仕事がしたかった」とあり、ここから「図書館ボランティア」の発想がうまれた。1996年度後期から、配架、図書の乱落丁調べ、クリスマスツリーの装飾等を「ボランティア」として空き時間や放課後に手伝ってもらった[6]。学生図書委員は2000年度までで（短大の制度としての、各クラスから毎年選出された学生図書委員はこの年で終了）学生の声を直接聞く場ともなり、「意見箱」や学生の意見を反映したCDの購入等に結実した。この間、司書１名が退職した（1996年３月、司書５名に）。「今後は、委員以外のボランティアを積極的に受け入れ」「ボランティア…をPRできれば、より図書館に親しんでくれる学生を増やせるのでは」[7]と学生の協力に期待を持っていたことが伺える。

2001年４月㈱リコーの図書館システムLIMEDIOを導入した。2001年度の図書館ボランティアは延べ42名35時間20分の活動があった。2002年１月、2003年３月、図書館から他部署に異動があり、司書は３名となった。当時３名共、図書館勤務15年以上のベテラン司書だったが、危機感を抱き、サービスの低下をどうくい止めるかが最重要課題となった。オリエンテーションで学生にボランティアを募ったところ、2002年度は延べ93名80時間56分、2003年度は延べ100名126時間30分の奉仕があった[8]。その後もボランティア活動は現在まで続いているが、オリエンテーションでPRした後の４月～５月までは活発なボランティア活動だが、それ以降が続かないという悩みがあった。2008年４月、大学開学と同時に館名を変更し「北陸学院大学ヘッセル記念図書館」となった。また私立短期大学図書館協議会を退会し、私立大学図書館協議会に入会した[9]。またこの年度から、図書館貸出上位10名程度を表彰する「トップリーダー賞」を開設した。2009年12月人事異動があり、教務へ司書が１名異動し、庶務から司書資格を持つが司書未経験の１名が着任した。

2013年３月、司書１名が定年退職し、司書２名と臨時職員（４時間）の司書１名という、現場にとっては絶望的と思える体制となった。頼みの図書館ボランティア活動も、例年６月以降は奉仕を見込めず、八方塞がりの状況であったが、学生たちとの出会いが事態を変えるきっかけとなった。それこそが当館における「図書館サポーター」の誕生である。

Ⅳ．図書館サポーターとの協働

１． 図書館サポーター活動の開始

図書館サポーター１人目の学生は４年生で、それまでも図書館に本を借りに来ていたが、特別熱心な利用者ではなかった。空き時間が多くなったこと、アパートが大学の近所であったことから、図書館に通うようになった。その学生との会話の中で、図書館が「利用者サービス」と考えて行っていたPRのほとんどを「気づいていなかった」という驚愕の事実に直面した。

「新着図書の書架」の存在、「ガラスケース」の展示、「新刊の帯」の掲示、「絵本コーナー」の新着絵本の紹介等を知らないという現実を前に、学生と図書館サイドの温度差（視点の差）に気づけたのが、今から思えば「図書館サポーター」活動を軌道に乗せるポイントであった。

利用教育の場でも、ベテラン司書ゆえに「あれもこれも教えたい」と欲張り、知らずに「図書館用語」を使っていたかもしれない。「世代の差」は学生にとって「古くさい感覚」に見え、まったくPRになっていなかったのかもしれない。利用者が利用者を呼ぶ、口コミこそ最大の宣伝効果、とあちこちで言われる王道から、いつの間にか逸れてしまっていたのかもしれない。学生に図書館のPRを託すことこそ、最も効果的なPR方法ではないか、と考えるに至った。

またもう一人の学生は新入生で、高校時代「図書委員」経験者で、毎日のように顔を見せる図書館ファンであった。自らPOPを作成し、本の紹介をしたいと申し出があり、手始めに５冊紹介してくれたうちの３冊が貸し出され、その様子を見て、PRを「学生に任せる」手ごたえを感じた。

ボランティアの限界は、呼びかけに反応しても、継続がおぼつかない点にあった。「PR活動に特化した図書館サポーター」に役割を限定してスタートを切ることで、やがて「図書館サークル」として継続し自立した活動に育つのではないか。2013年度第２回図書館運営委員会[10]で「図書館の利用を活性化するため」「PRに特化した」「図書館サポーター募集」を協議事項にかけ了承を得、４学科（社会学科、幼児児童教育学科、食物栄養学科、コミュニティ文化学科）各２名以内[11]を後期から募集することになった。また、「図書館ボランティア」と「図書館サポーター」の区別がつかないとの指摘にこたえ「ヘッセル記念図書館サポーター創設趣旨」を作成し了承された[12]。

図書館サポーター活動が本格的に始動する前段階として、上記の４年生の視点は学生の平均的な感覚に近いのではないかとの立場で、「図書館は入って暗く、圧迫感がある」という意見にこたえ、入口付近のレイアウトを大幅に変更[13]した。見た目から、図書館は変わってきているとの印象を与えようとの試みであった。

2013年７月８日～19日の日程で、図書館サポーターを募集した。その結果、上記で触れた４年生、POP作成の新入生に、３名の１年生を加えた５名となった。大学、短大の全４学科から応募があり、幸先が良いスタートを切った。また、定員まで随時募集をかけることになった。７月25日に初顔合わせを行い、「ガラスケース」、「絵本コーナー」、レイアウト変更で新たにできた入口の「特別催事スペース」、階段下の「展示スペース」の各月の担当者を決め、「図書館の資料を使ってPR活動」を図書館サポーターに全面的に任せることになった。自ら申し出てくれた学生たちに負担をかけないために、リーダーを特に決めず、図書館サポーターへの連絡は図書館が行うことになった。また、予算が通れば「学生選書ツアー」も行いたいと告知した。その後、短大２年生が１名増え、2013年度の図書館サポーターは６名となった。

図書館サポーター活動に刺激を受け、第５回図書館運営委員[14]で、教職員も図書館のPR活動を応援してはどうか、という発言を受け、第７回図書館運営委員会[15]で図書館サポーターの展示スペースの一部を「教職員コーナー」とし、２～３か月をめどに担当者リレー形式で、教職員が学生にすすめる本を、コメントと共に紹介してもらうことになった。これは現在も継続しており、担当した教職員には、「自分の読書の記録を見直す作業で、とても楽しかった」と高く評価してもらっている。図書館サポーターから派生した活動を一言で言うと、図書館と他者との「コラボレーション」である。「図書館サポーター」は学生との、「教職員コーナー」は教職員との、そして、2014年２月から「就活応援本コーナー」を作り、学生支援課

とのコラボレーションも続いている。図書館の人数が少なければ、学生や教職員の力を借りよう、との発想の転換があり、人数が少ないということは、小回りがきくと言い換えられるのではないか、と前向きに捉えた成果であると考える。

2014年２月10日、１学科上限２万円の予算で、「図書館サポーター選書ツアー」を金沢市内の書店の協力を得て実施した。図書館サポーターは６名全員参加し、学生の視点で46冊（68,117円）を選書し、その模様は大学のFacebookにも紹介された。選書ツアーに参加した学生の感想は、「たくさんの本を選ぶことが出来て楽しかった」「図書館にすでにあることも多々あったので、新しい本を探すのは難しいと感じた」「来年も開催してほしい」と好評であった。

２月28日、図書館サポーター５名が出席して、選書の展示を行った。展示に入る前、来年度の活動案を話し合ってもらった。「（年間の）活動レポートや図書館だよりを作成したい」「お昼休みに図書館PR放送をかけたい」「オープンキャンパス、オリエンテーションの部活紹介、HP等でサポーター活動を宣伝する」「図書館のゆるキャラを作り、名前を募集したらどうか」「（貸出の際、返却日の日付をスタンプして渡している）返却日の栞デザインを募集しよう」等の意見が出された。2014年3月、図書館サポーターの２名が卒業し、在学生の４名が次年度も図書館サポーターを続けると表明してくれた。

2014年度第１回図書館運営委員会[16]で、引き続き図書館サポーターを募集することが了承され、特に定員を設けず、選書ツアーを前後期開催するため、予算を１万円ずつ増額することも決定した。そして、図書館サポーターを学生の主体的な活動にシフトするために、図書館情報学の若杉助教を顧問とすることになった。

２．図書館サポーター活動の進展

2014年度の図書館サポーター募集は各学科の定員を設けず、前年度までの活動を引き継ぎながら進めていくこととなった。2014年４月24日から新規の図書館サポーターの募集が開始され、図書館内・学内での募集ポスター掲示、司書による勧誘、教員による勧誘が進められた。

2014年５月28日に2014年度図書館サポーターの初会合が図書館で行われ、この時点で13名の学生が呼びかけに応え、参加してくれた。この後、６月に２名学生が増え、2014年度は大学・短大部の学生を併せて15名で活動を行うこととなった。図書館サポーターの各年度人数の変遷は表１にまとめた。

６月20日に再度、会合を行い今後の活動についてどういったことができるのか、図書館サポーター同士でディスカッションが行われた。その結果、幾つかの図書館活性化のためのアイデアが出された。一つは図書貸出時に返却期日を知らせるために渡している栞について、日付のサイズを大きくし視認性の向上により延滞を防ぐ案がだされ、実行に移された。さらに栞自体のデザインも新しくしたいとの希望が図書館から出され、栞のデザインは図書館サポーターだけでなく学生からも募ることとなった。他にも図書館内の展示スペースを持ち回りで担当し、資料などの展示を図書館サポーターが行うこととなった。図書館出入り口脇のガラスケース内や、さらに７月末に新しく設置された図書館２階踊り場の黒板などが、図書館サポーターの担当となった。

表１　図書館サポーター学生数の変遷

	大学								短大				
	社会				幼教				食栄		コミ		
	1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	1年	2年	1年	2年	合計
2013 年度	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	6
2014 年度	0	2	1	0	3	0	0	1	1	1	4	2	15
2015 年度	4	0	2	1	0	3	0	0	0	1	1	4	16

2013年度に実施して図書館サポーターからも利用者からも好評だった、選書ツアーは2014年度も継続して行われた。前期試験後の８月２日午後に2013年度と同じ金沢市の書店にて選書ツアーが実施された。各学科３万円、合計12万円の予算が割り当てられ、2013年度よりも計４万円が増額された。そして後期授業開始前の９月16日午後、図書館にて選書した本を使った展示準備を行った。

後期の授業が始まると、図書館サポーターは４学科の学生に跨っているため、なかなか会合のためのスケジュール調整が困難となり、集合して活動する形から随時それぞれで活動を行う形へと変化していった。この時点においても、スケジュール調整や学生への連絡などは図書館が主体になって行っており、学生による自主的な運営という段階には至っていない。さらに、図書館サポーターの活動を大学のサークル活動にしてはどうか、というアイデアが大学事務方より示された。ただ、図書館サポーターのあり方はまさに模索中であり、サークル化が適切な方法であるとは判断できなかったため、2015年９月現在においてもサークル化は行っていない。ただし、図書館サポーターの位置づけは大学内で曖昧なままであり、何らかの処置は必要であると考えられる。

2014年度後期も前期同様に図書館内の展示スペースを持ち回りで担当し、資料などの展示を図書館サポーターが引き続き行うこととなった。さらに11月22日に2014年度二回目の選書ツアーを行うことが決定し、この頃には展示と選書ツアーについて、図書館サポーターの活動内容として定着してきたように思われる。

11月初旬には図書館内に「白紙の本」の形をしたノートが設置され、「図書館ノート」という名称で利用者にコメントなどを書き込んでもらう試みを開始した。

11月22日の選書ツアーでは25冊の選書が行われ、12月１日に展示準備を行った。12月９日に雑誌架を移動させ、選書ツアー展示用の什器として設置され選書の展示の改善が行われた。これは12月15日に図書館２階にラーニングコモンズスペースを設置したため、余剰となった雑誌架を流用したものである。雑誌架を選書本の展示に使用することにより、来館した利用者に対して表紙を見やすく展示することが、できるようになった。

図書館２階に設けられたラーニングコモンズの空間は、2014年12月15日より正式に使用が開始された。しかし、2015年９月現在でラーニングコモンズの常駐のスタッフは居らず、このラーニングコモンズの活用については、いまだ模索的な状況であるといえる。

2015年３月には卒業しない年度の学生に対して、2015年度の図書館サポーター継続を依頼し、全ての学生がこれを承諾してくれた。卒業する図書館サポーターは４名、2015年度も図書館サポーターを継続してくれた学生は11名となった。また、図書館サポーターのうち１名が自主的に図書館のパンフレットを作成してきたため、司書や図書館長、図書館サポーター顧問の協議修正の上で2015年度新入生の図書館オリエンテーションで使用した。

引き続き、2015年度もスケジュール的に全体的な会合が困難であったため、各図書館サポーターが図書館内の展示や栞のデザインなどを個別で行う形で進めていくこととなった。また、４月末には図書館サポーターに対して、新しい企画アイデアを出してもらうため司書による、ヘッセル記念図書館ツアーが数度に分けて行われた。

2015年５月11日より新規の図書館サポーター募集を開始した。その結果、大学から４名、短大部から１名の応募があり、2014年度からの継続メンバーと併せて16名で活動することとなった。

2015年５月、図書館運営委員で「保育原理」担当教員が、幼児児童教育学科１年生に、「泥だんご」を作り、その作成過程を絵本にするという課題を出したので、図書館に「泥だんご」コーナーを作りたいと申し出があった。図書館に所蔵する図書、DVDを集め閲覧のみとし、前年度に学生が作成した「泥だんご」の一部を教員とのコラボレーションとして展示した。また、図書館サポーターである２年生に、「泥だんご講座」を開くことを提案し、１名が２回講座を開催してくれることになった。この企画について図書館はポスター掲示をし、教員はメールで１年生全員に呼びかけた。講座は図書館２階のライブラリー・ラーニング・コモンズ（以下LLC）で行い、１回目は３名、２回目は18名の参加があり、テラスで泥だん

ごを作る実演も行った。また、この「泥だんご講座」では、図書館サポーター以外の学生が講座をサポートし、広く学生を巻き込んだ活動の端緒がうかがえる結果となった。

2015年６月16日、以前から図書館サポーターの１名が、幼児児童教育学科授業内での小学校の「生活科」の指導案作りで図書館に資料を探しに来ていたが、15分のデモンストレーションも無事に終了したと報告にきた。その際、余った配布用のプリントを活用し、昼休みに15分程度の発表をもう一度LLCでやってみないか、と司書が提案し、やってみたいと反応があった。また、別の図書館サポーターの学生が「毎週お昼の学生講座(以下、学生講座)」と命名してくれ、次の週の講師を引き受けてくれた。以上の経緯により学生講座を企画することとなった。

このような、図書館の場を使った学生による講座というアイデアの有効性から、６月中旬に学生講座を、ある程度の定期的な開催を目指すことになり，６月25日に第１回の学生講座を開催した。12時45分から13時までの15分間で、参加者は30名（うち学生は24名）であった。講師の学生は、「１年生が参加してくれたことが嬉しかったし、生活科のデモンストレーションの復習になり、もっとこうしたかった、を試すこともでき、自信につながった」との感想である。第２回は図書館サポーター、第３回、第５回は図書館サポーター以外の学生が講師を行い、第４回は図書館サポーターで生活科を受講していない学生が担当し、学生講座は裾野を広げている。2015年度前期で５名の学生が講座を行ってくれた。実施日時と参加人数などについては表２にまとめてある。

2015年度前期の締めくくりとして、８月１日に累計４回目の選書ツアーが実施された。11名の図書館サポーターが参加し、計30冊の選書が行われた。これまでの選書ツアーの実施状況については表３にまとめてある。

ここまで、述べてきたように2015年度前期終了の時点で図書館サポーターは２年間の活動を続けてきた。これにより、おおむね定期的に行う業務内容が決定されてきた。それは、図書館内のガラスケースや展示スペースなどの展示企画、定期的な選書ツアーへの参加と選書本のポップ作成の二つが大きなものとして挙げられる。他にも随時、栞のデザイン、季節にあった図書館内の装飾なども図書館サポーターの協力が得られている部分である。

表２　2015 年度前期　「毎週お昼の学生講座」実施状況

	日時	講座名	学生 参加人数	参加 人数計
第1回	6月 25 日	白い線の謎	24	30
第2回	7月1日	僕のノート	3	9
第3回	7月9日	ホタルの光る謎	11	13
第4回	7月 14 日	パネルシアター実演 「ねずみの嫁入り」	15	19
第5回	7月 15 日	楽しく生きるには	16	19

表３　選書ツアー　実施状況

	日時	参加人数	選書冊数	金額
第1回	2014 年2月 10 日	6名（全員）	46 冊	68,117 円
第2回	2014 年8月2日	11 名（15 名中）	55 冊	74,616 円
第3回	2014 年 11 月 21 日	7名（〃）	25 冊	36,477 円
第4回	2015 年8月1日	11 名（16 名中）	30 冊	45,232 円

Ⅴ．今後の課題

図書館でさまざまなサービスや企画を提供するメリットは、「どなたでも参加できます」に尽きる。例えば、「毎週お昼の学生講座」に限らず図書館の企画を積極的に全学の学生や教職員に周知をはかる必要がある。いくら教職員とともに一部の学生のみが協働しても、それだけでは限界がある。全学的な巻き込みが必要になってくると思われる。学生講座は主に幼児児童教育学科の学生が授業内で作成した指導案を活用して始めたものであるが、これにとどまらず全ての学生が講座の講師となることが望ましく、その可能性は十分にあると考えている。

そのためにも、学生の学習への意欲を増進させ、教職員に大学図書館の学術情報基盤としての重要性を理解してもらう必要がある。この学生の学習意欲の問題は、大学図書館にとどまらず大学全体の問題だと認識されるはずである。

ヘッセル記念図書館における2014年度の利用者１人あたり年間貸出冊数は22.4冊となっており、これは決して少ない数ではない。しかしながら、幾分主観的なものになるが「大学図書館内の賑わい」という意味では、まだまだ改善の余地があると思われる。もっと多くの学生に、常に大学図書館に足を運んでもらい、図書館を活用する術を学んで欲しいと考えている。

そういった、大学図書館としての目標を達するためにも、図書館サポーターを今後も続けていく必要がある。司書や顧問の教員がいなくとも、自主的・能動的に図書館サポーターが動けるようになることが望ましい。しかし、図書館サポーターが作られた経緯を鑑みれば、ボランティア活動からPR活動に特化した「図書館サポーター」が生まれたのである。学生に過度の負担をかけないという意味において、例えばリーダーを決めざるを得ないサークル化がベストかどうかは、現時点では判断が難しく、さらなる熟慮が必要だと思われる。

2015年度から新たに「図書館サポーターNews」を作成し、誰がいつ何を担当してくれたか、選書ツアーはどうだったか等、図書館サポーター全員にメール配信している。このように教職員や図書館が関わることが、むしろ学生のモチベーションを維持することになり、継続した活動となっていくのではないかとも考える。図書館が活性化し、学生の自学自習、アクティブ・ラーニングを質的に高められる活動に育ちつつある芽に、どう関わり伸ばし続けるかが一番の課題である。

〈注・参考文献〉

[1] 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会.“大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像.”文部科学省．2010年12月．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm，（参照2015/10/5）.

[2] 八木澤ちひろ.“CA1795 - 動向レビュー：大学図書館における学生協働について－学生協働まっぷの事例から－.”カレントアウェアネス・ポータル．2013年６月20日．http://current.ndl.go.jp/ca1795，（参照2015/10/5）.

[3] 文部科学省.“平成26年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告について.”文部科学省．2015年３月31日．http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/03/1356099.htm,（参照2015/10/5）.

[4] 梶井重雄.「新図書館に思う」/「点鐘」№1（北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館,1982）
開館当時の名称は「北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館」である。

[5] 「学生図書委員会」って何？/「点鐘」№35（〃　1994）

[6] 「点鐘」№39, 42, 44, 46, 48（〃　，1996, 1998, 1999, 2001）

[7] 「図書館報告」/「点鐘」№44（〃　，1999）

[8] 「図書館報告」/「点鐘」№52, 54（〃　，2003, 2004）

[9] 2008年９月11日総会承認後正式加盟

[10] 2013年５月23日開催、「図書館サポーター」活動開始を大学評議会の報告事項に上程

[11] 学科の偏りを防ぐため、定員を設けた

[12] 2013年６月18日「2013年度第3回図書館運営委員会」協議事項

[13] 2013年６月19～26日　文庫架、新聞架、新刊書架、雑誌架、「点鐘の鐘」（創立者が学院創立の日（1885年９月９日）に鳴らした鐘）の移動を行った

[14] 2013年９月24日開催

[15] 2013年11月９日開催

[16] 2014年４月22日開催